

# 政治的エピソード記憶と習慣的投票参加

— 投票行動の記憶にまつわる JES III パネル・データ分析 —

岡田陽介

のである。

## 1. はじめに

本稿の目的は、有権者の投票参加、中でも、複数回の選挙で投票に参加し続ける習慣的投票参加に焦点を当て、習慣的投票参加が如何なる要因によって規定されるのかを探るものである。

習慣的投票参加は継続した投票参加と位置づけられることから、既存の投票参加研究の拡張概念として捉えれば、政治関心や政治的有效性感覚、政党支持強度、投票義務感といった、投票参加を促進する心理的な諸要因（三宅、1989；蒲島、1988）からの検討が可能である。他方、継続的な投票参加という点では、習慣的投票参加は過去の投票参加と当該選挙における投票参加という時間的な隔たりを有した投票行動である。したがって、習慣的投票参加の規定要因は、単に、当該選挙時点の投票参加の規定要因からの検討に留まらず、過去の行動と当該選挙における行動との間の要因に焦点を当てることや、両行動間を媒介する要因の検討が必要となる。

本稿は、過去の投票行動と当該選挙の投票行動とを媒介し、習慣的な投票参加を説明する新たな独立変数として、有権者自身の過去の投票行動の記憶である「政治的エピソード記憶」を位置づける。そして、有権者の投票経験とその記憶とが後の投票行動に影響を与えることを明らかにするも

## 2. 先行研究

### 2.1 習慣的投票

習慣的な投票には、過去の選挙と当該選挙との投票方向の一致という投票方向の議論（Richardson, 1986, 1988）と、過去の選挙と当該選挙の継続的な参加という投票参加の議論（Gerber, Green & Shachar, 2003; Green & Shachar, 2000; Plutzer, 2002; Fowler, 2006）とが存在する。何れも広義には両選挙間の行動の一致と捉えられるが、習慣的な投票方向においては、習慣的投票者は安定した政党帰属意識の保有者と比べると政策争点への関与や政党イメージ、政党を支援する外部組織との繋がりが低いことが挙げられ、習慣的投票参加においては、その要因として、投票への参加とその良い評価とが位置づけられている（Bendor, Diermeier & Ting, 2003；荒井、2006）。

これらの議論は、投票方向であれ投票参加であれ、習慣的な投票は当該選挙時点の政策や政党に対する心理的なコミットメントというよりは、有権者自身の経験的要因に基づくものであることを示唆している。すなわち、過去の投票経験に強く規定され、過去の投票経験が時間を経て後の投票時点で影響を与えることを示している。したがって、過去の投票経験に焦点を当てれば、「先の選

挙では特定の政党（の候補者）に投票した」、「先の選挙では投票に行った（棄権した）」という経験が、後の投票時点で投票行動を規定するといえる。しかしながら、選挙間には少なくとも数年単位での時間的な間隔が存在することから、過去の投票行動の経験自体が、直接、後の投票行動を規定するとは考えにくい。つまり、過去の投票行動と当該選挙の投票行動とを繋ぐ媒介要因が必要となり、そうした媒介要因の存在なくしては過去の経験と現在の行動との関連を議論することは出来ないといえる。そこで本稿では、過去と当該選挙の投票行動との間にパネル・データ分析によって観察可能となる有権者自身の「記憶」を媒介要因として明示的に据えることで、選挙間の時間的間隔を埋めるとともに、投票行動研究における新たな独立変数の提示を行いたい。

## 2.2 長期記憶の記憶区分

人間の長期記憶は、主として2つの種類の記憶に区分される。一つは、時間や場所に関連づけられた出来事の記憶としての「エピソード記憶」、もう一つは、言語や知識に関連する抽象的な記憶としての「意味記憶」である（Tulving, 1972, 1983）。既存の投票行動研究における記憶研究を整理すれば、その多くはスキーマ（池田, 1991, 1994, 1997；稲増・池田, 2007）や政治知識（今井, 2008; Delli Carpini & Keeter, 1996; 山崎, 2008）を中心として、投票行動や投票参加との関連に焦点が当てられた。スキーマは「特定事象に関する属性的・因果的・相関的・規約的な知識や信念の構造」（池田, 1991）、政治的知識は「長期記憶に貯蔵されている政治についての事実に基づいた情報の範囲」（Delli Carpini & Keeter, 1996）と定義される。つまり、何れも記憶の抽象的・知識的側面としての意味記憶に焦点が当てたもので

ある。他方、習慣的投票参加の主たる説明要因として本稿が位置づける経験の記憶、中でも、過去の選挙における投票経験の記憶は、過去の選挙での有権者自身の投票行動の記憶を前提としている。つまり、記憶区分では時間と場所とに関連づけられたエピソード記憶である。従来の投票行動研究においては、エピソード記憶からの議論は少ないが、一部、エピソード記憶と政治意識や投票参加との関連が扱われている。そこでは、パネル・データを用いた分析によって、投票参加の記憶が後の投票参加を促進することや（岡田, 2008；Okada, 2013）、記憶にまつわる感情を考慮した分析によって、投票行動や様々な政治的経験の「良い」記憶が後の政治意識や投票参加を促進し、「悪い」記憶は阻害することが示されている（岡田, 2011a；平野・岡田, 2014）<sup>①</sup>。ただし、これらは主に一時点の投票参加を説明する議論である。習慣的投票参加が一時点の投票参加の拡張概念であるとするならば、こうした知見を習慣的投票の議論に対して適用し、新たな知見を引き出すこともできよう。

## 2.3 エピソード記憶の行動への影響

エピソード記憶が人の行動選択に与える効果は主として消費者行動研究で研究が蓄積されてきた。例えば、消費者の購買プロセスの古典的モデルである AIDMA（Hall, [1924] 1985）では、消費者は Attention（注意）、Interest（関心）、Desire（欲求）、Memory（記憶）、Action（行動）というプロセスを通して行動に至るとされる。これは、関心や欲求といった心理的要因が記憶を媒介して行動に影響を与えることを示している。また、情報処理過程においてエピソード記憶の想起喚起が行われると、そうでない場合と比べて広告や製品に対する評価を上昇させたり、製品特性の考慮や製品特性への注意を減少させるとされる（Baum-

gartner, Sujan & Bettman, 1992; Sujan, Bettman & Baumgartner, 1993)。さらには、認知的ヒューリスティクスにおける「利用可能性ヒューリスティクス」では、意思決定場面における記憶の該当例の存在が行動選択に影響を与えると考えられる (Tversky & Kahneman, 1974)。

これらの知見は、エピソード記憶の保持と想起とが後の行動選択場面において、対象の評価を上昇させたり、他の心理的要因の効果を低減させたりすることで、エピソード記憶自体が行動選択を左右する要因となることを示している。これを政治的事柄の行動選択や習慣的投票参加の議論に敷衍すれば、政治的事柄にまつわる保持されたエピソード記憶が政治的事柄の行動選択を左右し、選挙における行動選択場面では投票に参加するという選択肢の評価が上昇することで、結果として保持された過去の投票行動の記憶に基づいて参加行動が選択・促進されるといえる。

### 3. 仮説

本稿ではエピソード記憶のうち、政治的事柄にまつわる記憶を「政治的エピソード記憶」とし、「政治的な事柄についての、時間や場所に関連した自身の出来事の記憶」と定義する。政治的エピソード記憶には、候補者の演説を聞いたり、候補者と会話や握手をしたりなどの記憶や、メディアでの報道を通してであっても、候補者や政党に対して好悪を感じた記憶など様々なものがある (岡田, 2011a; 平野・岡田, 2014)。これらのうち、本稿では、既存のサーベイデータで観察可能な「政治的エピソード記憶」として、過去の自身の投票行動の経験に焦点を当て、その記憶の量と習慣的投票参加との関連を探る。以上から、本稿が掲げる仮説は次のとおりである。

仮説1：自身の投票行動の記憶を多く有している有権者はそうでない有権者に比べて継続して投票に参加する

仮説2：政治的エピソード記憶は、投票参加を促進する政治意識の効果を低減させる

仮説1では、政治的エピソード記憶を投票経験の記憶として、過去の投票方向の記憶に焦点を当てる。投票という行動選択において「利用可能性ヒューリスティクス」に直接対応する記憶としては、過去の同様の状況における記憶、すなわち、自身の投票行動の記憶が該当する。したがって、自身の投票行動の記憶を多く有している有権者ほど、投票に参加するという行動が選択され、結果として継続的に投票に参加するといえる。なお、「投票参加」の記憶ではなく、何れの政党や候補者に投票したのかという「投票方向」の記憶を用いるのは、投票方向の記憶の検討によって投票参加の記憶を細分化するためである。投票方向の検討は、記憶についての詳細な検討を可能にする点で、主として投票参加の記憶に焦点を当てていた従来の政治的エピソード記憶研究 (岡田, 2008; Okada, 2013) の質的拡充を可能にする。また、習慣的な投票では習慣的投票参加に焦点を当てる。習慣的な投票には先述のとおり投票方向の議論も存在するが、投票方向の行動選択には何れの政党への投票かという複数の選択肢が存在している。したがって、投票方向の一致と投票方向の選択との組み合わせが増加し、結果の解釈を複雑にしかねない。そこで、投票/棄権という、より単純化された行動選択についての分析結果を蓄積することで、習慣的な投票方向の議論に対しての基礎的な研究蓄積を提供する。

仮説2では、エピソード記憶の保持と想起とが行動選択場面において他の心理的要因の効果を低

減させるという知見 (Baumgartner, Sujan & Bettman, 1992; Sujan, Bettman & Baumgartner, 1993) から、政治的エピソード記憶は、投票参加を促進させる既存研究の独立変数である政治意識の諸要因の効果を阻害すると考えられる。また、ヒューリスティクスな判断は、情報の一部に着目することで判断にかかる認知コストを低減させるものである。したがって、過去の自身の行動の記憶という一部の情報に基づいて、投票という行動選択の判断が行われる場合、過去の自身の行動の記憶以外の要因による規定力が低減すると考えられる。仮に、政治的エピソード記憶においてもそうした効果が確認できれば、投票行動に対する新たな独立変数としての政治的エピソード記憶の位置づけをより明確にすることができる。

#### 4. データ・変数

##### 4.1 データ

分析には、2001年から2005年までの国政選挙を対象とした全国面接調査である JESⅢ パネル調査データを用いた。同一人物に対する追跡調査であるパネル・データは、投票参加の変化の有無、すなわち、習慣的投票参加の有無を観察できる。また、JESⅢ調査では投票経験の記憶として、各調査時点において過去2回の選挙での投票政党を尋ねているが、パネル・データを遡ることで記憶と実際の投票政党との一致（記憶の正確さ）も観察可能となる。したがって、習慣的投票参加や有権者の投票行動にまつわる記憶の分析に有用なデータである。なお、調査期間中の国政選挙は衆院選と参院選とが交互に行われていることから、過去2回の選挙のうち、当該選挙時点 ( $t$ ) を起点として、前回選挙 ( $t-1$ ) は異なる制度間（例えば衆議院と参議院）、前々回選挙 ( $t-2$ ) は同一の制

表1 前回選挙・前々回選挙の組み合わせ

$t$	$t-1$	$t-2$
2005年(衆院選)	2004年(参院選)	2003年(衆院選)
2004年(参院選)	2003年(衆院選)	2001年(参院選)
2003年(衆院選)	2001年(参院選)	—
2001年(参院選)	—	—

度間（例えば衆議院と参議院）の組合せとなる。具体的には表1のとおりである。

##### 4.2 習慣的投票参加

従属変数の習慣的投票参加は、広義には衆議院と参議院や、国政選挙と地方選挙など、制度を問わずすべての選挙に継続して参加する場合と、狭義には、例えば衆議院選挙だけでは参加するというような、同一の制度間で継続的に参加する場合とが存在すると考えられる。先述のとおり、本稿の調査期間中の国政選挙は衆院選と参院選とが交互に行われていることから、広義の習慣的投票参加は、 $t-1$  間の選挙の継続的参加の積み重ねによって表現できる。また、狭義の習慣的投票参加は  $t-2$  間の選挙での投票参加として表現できる。すべての選挙に継続して参加し続ける広義の習慣的投票のみを操作化すると、こうした違いを確認できなくなるため、本稿では、制度の違いを考慮に入れた狭義の習慣的投票者の操作化を行うこととした。

具体的には以下のように操作化した。まず、 $t-1$  から  $t$  までの期間、および、 $t-2$  から  $t$  までの期間における投票参加の変化について、何れの選挙の投票も参加したと回答した「習慣的投票者」、何れか一方の選挙の投票に参加した「散発的投票者」、何れの選挙の投票も棄権した「習慣的非投票者」の3類型を作成した。それぞれの個体間 (between) での集計を行った分布は図1に示す

## 政治的エピソード記憶と習慣的投票参加

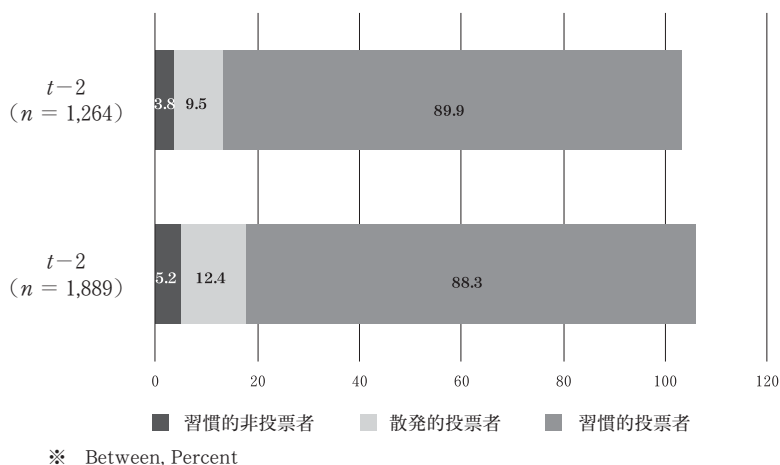


図1 習慣的投票参加の分布

とおりである<sup>(2)</sup>。習慣的投票者の割合は  $t$  と  $t-1$  との間の変化で 88.3%， $t-2$  との間の変化で 89.9% と相対的に高いが、散発的投票者や習慣的非投票者の存在も一定数確認できる<sup>(3)</sup>。また、同一制度間 ( $t-2$ ) と異なる制度間 ( $t-1$ ) とでの違いでは、同一制度間の習慣的投票参加の割合が高い。これは、例えば衆議院選挙だけは必ず投票に行くというような制度に拘束される習慣的投票者の存在を示唆するものである。

### 4.3 政治的エピソード記憶：過去の投票方向の記憶

本稿では政治的エピソード記憶として過去の投票方向の記憶に焦点を当てた。さらに記憶の有無に加えてその正確さを考慮し、過去の選挙における実際の投票政党と当該選挙時点の想起との一致を用いた。記憶の正確さを考慮したのは、時間経過がエピソード記憶の想起や正確さを阻害するため (Linton, 1982)、仮に記憶が存在しても、それが正確であるとは限らず、想起のみを用いると記憶の効果の過大評価に繋がるためである。なお、本来、投票方向の記憶の正確さは正確な記憶か否かという質的変数の特徴を持っているが、本稿で

は複数回の選挙にまつわる投票方向の記憶の想起を扱うため、合計し量的変数として扱うこととした。これは当該選挙時点における政治的エピソード記憶の質的相違ではなく、過去の投票行動にまつわる記憶の総量を考慮するためである。もちろん、記憶を質的変数として扱うことも考えられるが、その場合、各想起パターンをダミー変数化することになる。これは分析において独立変数の数を過度に増やすことになるだけでなく、選挙毎の組み合わせに由来する効果の違いを考慮することになる<sup>(4)</sup>。したがって、記憶の質的考慮は結果の解釈をより複雑にさせてしまい、政治的エピソード記憶そのものの効果を過小評価しかねないため採用しなかった<sup>(5)</sup>。

操作化にあたっては、正確な方向想起 (2)、不正確な方向想起 (1)、正確な棄権想起 (0) として得点を与え、 $t-1$  にまつわる記憶と  $t-2$  にまつわる記憶との別、また両者の計、そして、選挙区にまつわる想起と比例区にまつわる想起の 5 つの記憶パターンを作成した。個体間 (between) で集計した分布は図 2 のとおりである。

各記憶得点の幅は 0~4 ( $t-1$  と  $t-2$  との想起を合算した全想起においては最大値 8) であり、

政治的エピソード記憶と習慣的投票参加

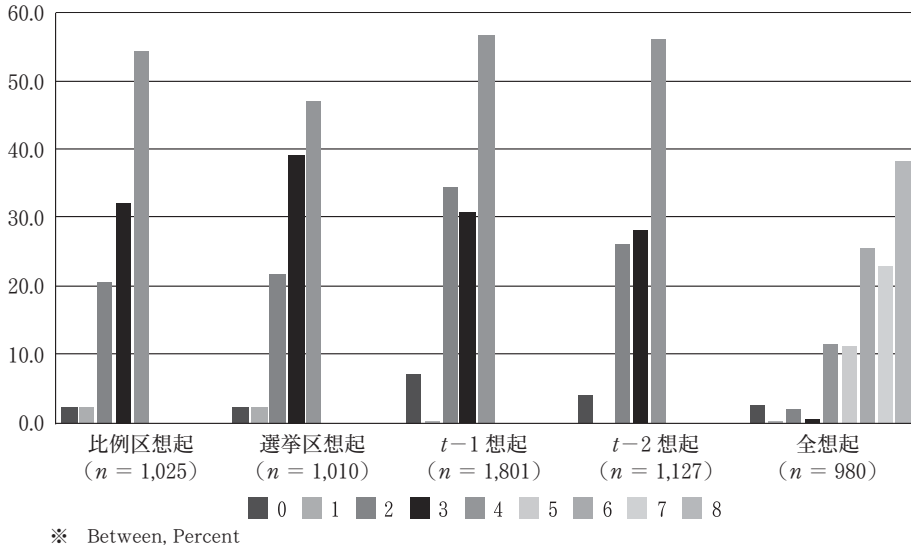


図2 想起得点の分布

得点が大きくなるにつれその割合が大きくなる傾向にある。また何れの組み合わせにおいても、最大得点で最も割合が大きく 38.5~56.6%であり、すべてにおいて正確な方向想起を行った回答者が多く全体の半数程度を占めている。逆に、すべてにおいて棄権したと正確に想起した最小得点の割合は 2.4~7.4%と、他と比較して少数であることから、不正確な想起を含む回答者が一定程度存在することを示している<sup>(6)</sup>。

5. 分 析

習慣的投票参加に対する政治的エピソード記憶の効果の分析にあたっては、従属変数の習慣的投票参加としては「t-1 からの投票変化」および「t-2 からの投票変化」の 2 つが存在し、独立変数の政治的エピソード記憶としては想起対象の別に応じて「t-1 の想起」、「t-2 の想起」、「t-1 及び t-2 の想起の合計 (全想起)」、「比例区想起」、「選挙区想起」が存在する。分析は、それぞれ従属変数と独立変数との組合せから 8 つのモデルを

表2 従属変数と独立変数の組合せ

Model	従属変数	独立変数
	投票変化の起点	記憶対象
1	t-1	t-1
2	t-2	t-2
3	t-1	全想起
4	t-2	全想起
5	t-1	比例区
6	t-2	比例区
7	t-1	選挙区
8	t-2	選挙区

推定する (表 2)。複数のモデルを推定する作業はやや煩雑になるが、仮に想起の時期の違いや、比例区・選挙区の想起の違いにかかわらず政治的エピソード記憶の安定的な効果が確認できれば、政治的エピソード記憶が習慣的投票参加に与えるより一般的な効果を確認できる。

統制変数には、デモグラフィック要因 (性別、年齢、教育程度、居住年数、都市規模) と、心理的な要因として政治意識 (政治関心、有効性感覚、政党支持強度、投票義務感)、そして、記憶区分における意味記憶としての政治知識を用い、統制

変数のみのモデルと政治的エピソード記憶を加えたモデルとを推定した。統制変数のみのモデルは、既存の投票参加研究で効果を持つ要因群での推定である。したがって、習慣的投票参加を投票参加の拡張概念として位置づけ、既存の要因群でその効果を確認する分析となる。他方、政治的エピソード記憶を加えたモデルは、そうした既存の要因群で統制した上で、新たな独立変数としての政治的エピソード記憶の効果を確認するものである。

なお、 $t$ を起点として複数の異時点間の変化を確認する分析であることから、同一回答者がデータ上に複数回登場するパネル・データとなる。これは、同一回答者についての変化の情報量を増大させる利点がある<sup>(7)</sup>。ただし、個体の効果を考慮する必要があることから本稿ではパネル・データ分析を用いた。通常、パネル・データ分析においては、固定効果モデル、変量効果モデル、プーリング回帰モデルの何れを採用するかを判別する必要があるが、本稿の分析では、統制変数に性別のような期間を通じて一定の値を持つ変数が含まれる。そのため、そうした変数の推定が行えない固定効果モデルについては分析を行わなかった。なお、変量効果モデルを採択するかプーリング回帰モデルを採択するかについての統計的検定の結果、すべての従属変数と独立変数との組合せにおいて変量効果モデルが採択された<sup>(8)</sup>。

まず、統制変数のみのモデルについて確認しよう（表3）。効果が確認できるのは、年齢と政治関心、政党支持強度、投票義務感の正の効果であり、しかも安定的な効果が認められる。各変数の効果は既存の投票参加研究でも示されるものであり、本稿の習慣的投票参加を対象としたパネル・データ分析においてもその効果が確認できる。先述のように、統制変数のみのモデルは、習慣的投票参加を投票参加の拡張概念として位置づけたも

のであるが、この結果はその妥当性を示すものであるといえる。また、特に投票義務感の正の効果が安定的である。これは、習慣的投票参加が継続的な参加を伴う行動であり、一時点の投票参加と比較してより参加に対する傾向が強い行動であることから、既存の投票参加研究でも主要な要因として位置づけられる投票義務感の効果がより強く影響しているものといえる。

次に、政治的エピソード記憶を加えたモデルについての結果を確認する（表4）。何れの従属変数と独立変数の組合せにおいても、既存の説明変数である各政治意識で統制してもなお、政治的エピソード記憶の効果が安定的に認められる。政治的エピソード記憶の係数は何れも正であることから、自身の投票経験の記憶を多く有している有権者はそうでない有権者に比べて継続して投票に参加することが確認され、仮説1を支持する結果となった。これは、習慣的投票参加が過去の投票経験とその記憶の蓄積によってもたらされることを示唆するものであろう。興味深いのは、政治的エピソード記憶の効果が $t-1$ の変化に対しても確認できる点である。 $t-1$ の変化は衆議院と参議院、参議院と衆議院のように異なる制度間での習慣的投票参加を意味している。したがって、政治的エピソード記憶は異なる制度間の習慣的投票参加に対しても効果を持つことが示された結果となった。なお、政治的エピソード記憶の想起対象が選挙区であるのか比例区であるのかによる違いも認められないことから、政治的エピソード記憶が、想起の時期の違いや、比例区・選挙区の想起の違いにかかわらず効果を示すものであるといえる。

一方で、統制変数の効果としては、投票義務感の正の効果と政党支持強度の一部の正の効果、そして年齢の正の効果が残るものの、それ以外の効果、特に政治関心の効果が認められなくなってい

政治的エピソード記憶と習慣的投票参加

表 3 習慣的投票参加に対する政治意識の効果 (統制変数モデル)

	Model 1 投票変化 ( $t-1$ ): 記憶 ( $t-1$ 想起)		Model 2 投票変化 ( $t-2$ ): 記憶 ( $t-2$ 想起)		Model 3 投票変化 ( $t-1$ ): 記憶 (全想起)		Model 4 投票変化 ( $t-2$ ): 記憶 (全想起)	
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.
性別 (男性)	.032	(.024)	-.006	(.025)	.009	(.029)	-.021	(.027)
年齢	.005***	(.001)	.005***	(.001)	.004**	(.001)	.005***	(.001)
教育程度	.034***	(.011)	.021 †	(.012)	.013	(.010)	.018	(.013)
居住年数	.037*	(.019)	.006	(.021)	.008	(.016)	.007	(.022)
都市規模	.003	(.008)	-.001	(.009)	.010	(.010)	.003	(.009)
政治関心	.024*	(.012)	.044*	(.019)	.023 †	(.014)	.041*	(.021)
有効性感覚	-.004	(.005)	.012	(.008)	-.002	(.005)	.012	(.008)
支持強度	.042***	(.009)	.027 †	(.015)	.035**	(.013)	.026 †	(.016)
投票義務感	.062***	(.016)	.119***	(.029)	.056***	(.017)	.129***	(.032)
政治知識	.004	(.008)	.020	(.017)	-.002	(.011)	.027	(.018)
定数	2.035***	(.114)	1.961***	(.171)	2.291***	(.142)	1.946***	(.180)
sigma_u		.374		.257		.351		.239
sigma_e		.156		.228		.103		.233
rho		.851		.559		.921		.514
N of obs		1767		860		759		759
N of groups		1159		710		615		615
R-sq: within		.012		.004		.023		.003
between		.152		.175		.106		.189
overall		.129		.155		.102		.162
Breusch-Pagan LM test		196.18***		44.82***		87.08***		43.25***
	Model 5 投票変化 ( $t-1$ ): 記憶 (比例区想起)		Model 6 投票変化 ( $t-2$ ): 記憶 (比例区想起)		Model 7 投票変化 ( $t-1$ ): 記憶 (選挙区想起)		Model 8 投票変化 ( $t-2$ ): 記憶 (選挙区想起)	
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.
性別 (男性)	.013	(.029)	-.019	(.026)	.002	(.029)	-.020	(.026)
年齢	.003*	(.001)	.004**	(.001)	.004**	(.001)	.005***	(.001)
教育程度	.013	(.010)	.017	(.013)	.014	(.010)	.017	(.012)
居住年数	.010	(.017)	.006	(.021)	.010	(.015)	.009	(.021)
都市規模	.010	(.010)	.004	(.009)	.011	(.010)	.003	(.009)
政治関心	.029*	(.014)	.049*	(.020)	.022 †	(.012)	.038 †	(.020)
有効性感覚	-.001	(.006)	.015 †	(.008)	-.003	(.005)	.010	(.008)
支持強度	.038**	(.013)	.028 †	(.015)	.032*	(.012)	.026 †	(.015)
投票義務感	.063***	(.018)	.128***	(.031)	.049***	(.015)	.135***	(.031)
政治知識	-.004	(.011)	.026	(.017)	-.001	(.010)	.027	(.017)
定数	2.291***	(.143)	1.954***	(.176)	2.298***	(.136)	1.948***	(.173)
sigma_u		.348		.234		.352		.240
sigma_e		.115		.233		.098		.232
rho		.902		.502		.927		.516
N of obs		802		802		791		791
N of groups		647		647		634		634
R-sq: within		.016		.003		.020		.000
between		.108		.190		.103		.189
overall		.105		.161		.096		.162
Breusch-Pagan LM test		80.36***		41.47***		90.01***		43.93***

※ 頑健性標準誤差。\*\*\*  $p < 0.001$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*  $p < 0.05$ , †  $p < 0.1$ 。



政治的エピソード記憶と習慣的投票参加

表4 習慣的投票参加に対する政治的エピソード記憶の効果 (全変数モデル)

	Model 1 投票変化 ( $t-1$ ): 記憶 ( $t-1$ 想起)		Model 2 投票変化 ( $t-2$ ): 記憶 ( $t-2$ 想起)		Model 3 投票変化 ( $t-1$ ): 記憶 (全想起)		Model 4 投票変化 ( $t-2$ ): 記憶 (全想起)		
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	
政治的エピソード記憶	.120***	(.011)	.169***	(.020)	.072***	(.011)	.107***	(.014)	
性別 (男性)	.024	(.021)	-.006	(.022)	.020	(.026)	-.002	(.023)	
年齢	.004***	(.001)	.004***	(.001)	.002	(.001)	.003*	(.001)	
教育程度	.021*	(.010)	.011	(.011)	.007	(.010)	.004	(.011)	
居住年数	.020	(.016)	-.004	(.019)	.002	(.016)	-.003	(.019)	
都市規模	.006	(.007)	.004	(.009)	.013	(.009)	.008	(.008)	
政治関心	.016	(.011)	.019	(.018)	.007	(.015)	.011	(.018)	
有効性感覚	.001	(.005)	.008	(.008)	.003	(.006)	.012	(.008)	
支持強度	.032***	(.009)	-.009	(.014)	.014	(.011)	-.016	(.014)	
投票義務感	.051**	(.016)	.087***	(.024)	.055**	(.021)	.095***	(.025)	
政治知識	.013	(.008)	.007	(.015)	-.006	(.012)	.023	(.017)	
定数	1.870***	(.107)	1.800***	(.154)	2.048***	(.151)	1.710***	(.162)	
sigma_u		.314		.223		.305		.174	
sigma_e		.151		.211		.102		.233	
rho		.812		.528		.900		.357	
N of obs		1767		860		759		759	
N of groups		1159		710		615		615	
R-sq: within		.085		.149		.037		.037	
between		.370		.346		.309		.401	
overall		.329		.333		.313		.372	
Breusch-Pagan LM test		126.49***		43.63***		57.54***		17.87***	
		Model 5 投票変化 ( $t-1$ ): 記憶 (比例区想起)		Model 6 投票変化 ( $t-2$ ): 記憶 (比例区想起)		Model 7 投票変化 ( $t-1$ ): 記憶 (選挙区想起)		Model 8 投票変化 ( $t-2$ ): 記憶 (選挙区想起)	
		Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.
政治的エピソード記憶		.124***	(.020)	.173***	(.024)	.089***	(.017)	.162***	(.024)
性別 (男性)		.027	(.026)	.003	(.023)	.005	(.027)	-.011	(.023)
年齢		.002	(.001)	.003*	(.001)	.003*	(.001)	.003**	(.001)
教育程度		.010	(.010)	.003	(.011)	.010	(.010)	.010	(.012)
居住年数		.005	(.016)	-.001	(.019)	.006	(.015)	.002	(.019)
都市規模		.013	(.009)	.008	(.008)	.013	(.010)	.006	(.009)
政治関心		.008	(.015)	.020	(.019)	.018	(.014)	.021	(.018)
有効性感覚		.004	(.006)	.017*	(.008)	.001	(.005)	.010	(.008)
支持強度		.019 †	(.001)	-.007	(.014)	.020 †	(.011)	-.006	(.014)
投票義務感		.058**	(.020)	.092***	(.025)	.055**	(.018)	.119***	(.026)
政治知識		-.008	(.012)	.024	(.016)	-.004	(.010)	.024	(.016)
定数		2.077***	(.148)	1.766***	(.162)	2.131***	(.145)	1.741***	(.163)
sigma_u			.310		.186		.319		.189
sigma_e			.113		.232		.098		.232
rho			.883		.393		.914		.399
N of obs			802		802		791		791
N of groups			647		647		634		634
R-sq: within			.046		.015		.035		.009
between			.277		.354		.245		.358
overall			.283		.329		.242		.324
Breusch-Pagan LM test			51.93***		20.35***		67.95***		22.08***

※ 頑健性標準誤差。\*\*\*  $p < 0.001$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*  $p < 0.05$ , †  $p < 0.1$ 。

る。これは、政治的エピソード記憶が投票参加を促進する政治意識の効果を低減させることを意味しており、仮説2を支持する結果となった。これは同時に、政治的エピソード記憶で統制すると、政治意識の効果がなくなることを意味しており、政治意識の諸変数が政治的エピソード記憶によって規定されていることを推測させるものでもある。こうした結果は、習慣的投票参加を説明する新たな独立変数としての政治的エピソード記憶の効果が示すものであろう。

残る統制変数の効果では投票義務感の効果が安定的である。先述のとおり、習慣的投票参加は継続的な参加を伴う点でより参加に対する傾向が強い行動であり、既存の投票参加研究でも主要な要因として位置づけられる投票義務感の効果が反映されているものといえる。ただし、政治的エピソード記憶と投票義務感とがそれぞれ効果を持つという結果からは、政治的エピソード記憶と投票義務感とが独立した要因であることも示唆される<sup>9)</sup>。

各モデル間の比較では、特に、同一制度間( $t-2$ )と異なる制度間( $t-1$ )において違いが認められる。特に、政党支持強度の違いが顕著であり、異なる制度間の習慣的投票参加に対して政党支持強度の正の効果が確認できる。これは、衆議院と衆議院、参議院と参議院のような同一制度の下では、習慣的投票に際して同一の候補者への投票が投票参加への動機となりうるが、異なる制度間では同一の候補者が存在しないために政党支持が継続的・習慣的な投票参加への動機となるものと考えられる。これは、当該選挙時点で支持政党のスキャンダルやメディアでのネガティブな報道などによって、政党支持を失うことで継続的・習慣的投票参加を阻害しかねないことを併せて示唆している。習慣的投票が $t-1$ の積み重ねであり、前回選挙での投票行動の政治的エピソード記憶が

後の投票参加を規定することからすれば、習慣的投票からの逸脱が、散発的投票者ひいては習慣的非投票者へと変容させてしまうことを意味するであろう。こうした効果は、統制変数だけのモデルでも同様の効果が確認できるが、政治的エピソード記憶を加えたモデル、すなわち、政治的エピソード記憶で統制された結果においてより顕著である。逆にいえば、同一制度間では政党支持の習慣的投票への効果が政治的エピソード記憶で統制されると効果を失うことを示しており、同一制度間の習慣的投票参加においては同一候補者に対する記憶の効果が存在することが示唆される点で興味深い。

## 6. 結論と含意

本稿は有権者の政治的事柄にまつわる記憶を「政治的エピソード記憶」と位置づけ、政治的エピソード記憶の中でも過去の選挙における有権者自身の投票方向の記憶が習慣的投票参加に対して持つ効果を確認した。分析の結果、本稿で明らかになったことは以下のとおりである。

第1に、選挙での投票に参加し何れかの政党や候補者に投票した経験を後の選挙時点まで記憶している有権者ほど、後の選挙における投票参加が促進され、継続した参加、すなわち、習慣的投票参加が促される。本稿で扱った記憶は有権者となって以後の記憶であることから、政治的社会化における後期政治的社会化過程の一側面を政治的エピソード記憶の視点から示したものである。これは、成人以後の後期政治的社会化における有権者教育の重要性を示唆するとともに、学校教育での公民科教育のような、初期政治的社会化における有権者教育の重要性をも示唆する。すなわち、政治的エピソード記憶の効果を初期政治的社会化過程に敷衍すれば、有権者になる以前の政治的経験とそ

の記憶が有権者となった後で想起され、後の投票参加や習慣的投票参加をもたらすであろう。そうした意味では、投票以外の政治的経験の記憶にも焦点を当て、政治的エピソード記憶の概念の拡充とその効果についての更なる検討が必要である。

第2に政治的エピソード記憶の効果は異なる制度間の習慣的投票参加に対しても効果を持つ。これは国政選挙間の効果に留まらず、国政選挙と地方選挙のような「異なるレベル」の選挙における政治的エピソード記憶の機能を示唆する。既存の投票行動研究では、衆院選と参院選、さらには国政選挙と地方選挙とは、異なる制度であるが故に独立して分析が行われてきたが、政治的エピソード記憶の視点は異なる制度の選挙を連続的に扱い、同一の分析組上に載せることを可能にさせるであろう。

第3に、政治的エピソード記憶の保持と想起は政治意識の諸変数の効果を低減させる。また、習慣的投票参加を促進する主要な要因は政治的エピソード記憶と投票義務感であることが明らかとなった。これは、習慣的投票参加者についての次のような有権者像を示唆する。すなわち、習慣的投票参加者は、過去の政治的エピソード記憶に基づいて継続的な投票参加を行う点で、参加が参加を呼び、結果として民主主義を支える参加民主主義論的な有権者となる。しかしながら、政治的関心や有効性感覚、政治知識といった要因では習慣的な投票参加がもたらされないことから、裏を返せば過去の投票の記憶や投票への義務感によって習慣的・惰性的に投票に参加し続ける有権者ともなりうる。選挙が民主主義に対する民意の入力であるとするならば、単に習慣的に参加し続けるだけでなく、どのような投票が行われているのか、すなわち、投票方向の議論を含めた習慣的投票の検討も必要であると考えられる点は本稿の課題である。そう

した意味では、本稿では扱わなかった政治的エピソード記憶の質的考慮もより求められる課題となろう。

以上のような課題も存在するが、本稿は習慣的投票参加ひいては広く投票参加の議論に対して、習慣的投票参加が既存の投票参加研究の拡張概念であることを示すとともに、政治的エピソード記憶という新たな独立変数の可能性を示すことができたといえる。

※本稿で使用したデータは、JESⅢプロジェクト研究：平成13-17年度文部科学省科学研究費特別推進研究「21世紀初頭の投票行動の全国的・時系列的調査研究」（池田謙一・小林良彰・平野浩）によるものである。また、本稿は、2012年日本政治学会現代政治過程研究フォーラム研究会での研究報告「習慣的投票参加の規定要因——政治的エピソード記憶からの検討——」、並びに、2012年度日本社会心理学会での研究報告「一貫した投票行動を支える自己の投票行動の記憶——習慣的投票のJESⅢパネルデータ分析——」に大幅に加筆・修正を施したものである。報告を通して多くの方々から有益なコメントを頂いた。また、匿名の2名の査読者から貴重なコメントを頂いたことに感謝いたします。

#### 〈補遺〉

変数のコーディングは以下のとおり。

#### 習慣的投票参加

国政選挙における  $t-1$  と  $t$ 、 $t-2$  と  $t$  間の投票参加について、1:「習慣的非投票者」、2:「散発的投票者」、3:「習慣的投票者」。

#### 政治的エピソード記憶

投票方向の想起の正確さについて、0:「正確な棄権想起」、1:「不正確な想起（間違い・忘れた）」、2:「正確な方向想起」とし、 $t-1$  想起、 $t-2$  想起、 $t-1$  および  $t-2$  想起、選挙区想起、比例区想起毎に集計。

#### 性別

0:「女性」、1:「男性」。

#### 年齢

調査時点における満年齢。

#### 教育程度

1:「新中学・旧小・旧高小」、2:「新高校・旧中学」、3:「高専・短大・専修学校」、4:「大学・大学院」。

#### 居住年数

1:「3年以下」, 2:「4~9年」, 3:「10~14年」, 4:「15年以上」, 5:「生まれてからずっと」。

#### 都市規模

1:「町村」, 2:「10万未満」, 3:「10万以上」, 4:「20万以上」, 5:「13大市」。

#### 政治関心

「あなたは政治上のできごとに、どれくらい注意を払っていますか」について、1:「全く注意していない」から4:「いつも注意を払っている」。

#### 政治的有効性感覚

「自分には政府のすることに対して、それを左右する力はない」について、1:「そうは思わない」から5:「そう思う」。

#### 政党支持強度

支持政党の有無と支持政党を持つ回答者に対する、「熱心な支持者」か「あまり熱心でない支持者」かの質問項目との組合せから、0:「支持政党なし」から3:「熱心な支持者」。

#### 投票義務感

1:「投票に行くかどうかは有権者が決めることなので、必ずしも選挙に参加しなくてもよい」、2:「有権者はできるだけ選挙に参加した方がよい」、3:「投票に行くことは有権者の義務であり、当然、選挙に行かなくてはならない」。

#### 政治知識

省庁名の認知数(最大14)を基に4段階(0個, 1~4個, 5~9個, 10~14個)。但し、2004年は省庁名の質問項目が存在しないため、「日本の首相になれる条件」、「憲法改正を発議するための条件」、「衆議院の選挙制度」についての正答数(0~3の4段階)。

#### 註

- (1) 投票方向の記憶を考慮したものとしては岡田(2011b)がある。
- (2) Betweenでの集計であるため合計は100%を超えている。
- (3) 一般に、世論調査において投票参加を尋ねる質問では「社会的望ましさ」から、実際には投票していないにもかかわらず、投票したと回答する回答者の存在が知られているが、本稿で用いたJESⅢ調査でも例外ではない。しかし、「社会的望ましさ」に基づく回答を考慮するような調査設計にはなっていないため、そうした考慮を行うことが出来ない。さらにパネル調査であることを考慮すると習慣的投票者の割合がさらに高くなると

考えられる点では留意が必要であり、今後の課題としたい。

- (4) 想起ダミーを用いる場合、参照カテゴリが必要となり、すべての質的相違についての直接的な効果を検討できないことも理由の1つである。
- (5) 従属変数が同一候補者への投票を伴うような「習慣的な投票方向」である場合には、記憶の質的考慮もより求められる。しかし、本稿が焦点を当てるのは、「習慣的な投票参加」および「過去の投票経験とその記憶の蓄積」であることから、量的な政治的エピソード記憶を採用した。質的考慮と習慣的な投票方向の関連については稿を改めたい。
- (6) この記憶得点は記憶の正確さの程度を示すとともに、数値が大きくなるほど投票参加への傾向を有した連続的な指標でもある。不正確な想起は、「投票時に実際に何れかの政党や候補者に投票したが、想起時点で間違った」か「実際に投票はしていないが、想起時点で何れかの政党や候補者に投票したと間違った」場合である。したがって、全く参加せず、そのことを正しく想起する「正確な棄権想起」に比べれば、たとえ不正確な想起であっても、投票時点と想起時点の何れかは投票参加への傾向を有している。
- (7) 複数のクロスセクショナルデータを用いるパネル・データは情報量が多く、自由度の増大、推計値の普遍性、多重共線性の解消をもたらす(Baltagi, 2005)。
- (8) Breusch-Pagan testにより、すべてのモデルについて変量効果の分散が0であるという帰無仮説(Var(u)=0)が棄却された。
- (9) 投票義務感は過去の投票経験の記憶を含めた意識であると仮定すれば、過去の投票経験としての政治的エピソード記憶が投票義務感を形成すると考えられる。こうした関連は他の政治についても想定可能であるが、政治意識の規定要因としての政治的エピソード記憶の効果については、因果の方向等を考慮した分析などが必要となることから稿を改めたい。

#### 参考文献

- 荒井紀一郎. 2006. 「参加経験とその評価にもとづく市民の政治参加メカニズム」『選挙学会紀要』第6号, 5-24頁。
- Baltagi, Badi H. 2005. *Econometric Analysis of Panel Data*, 3rd ed. Chichester: John Wiley & Sons.

- Baumgartner, Hans, Mita Sujan and James R. Bettman. 1992. "Autobiographical Memories, Affect and Consumer Information Processing," *Journal of Consumer Psychology*, 1: 53-82.
- Bendor, Jonathan, Daniel Diermeier and Michael M. Ting. 2003. "A Behavioral Model of Turnout," *American Political Science Review*, 97(2): 261-280.
- Delli Carpini, Michael X. and Scott Keeter. 1996. *What Americans Know About Politics and Why It Matters*, New Haven: Yale University Press.
- Fowler, James H. 2006. "Habitual Voting and Behavioral Turnout," *Journal of Politics*, 68(2): 335-344.
- Gerber, Alan S., Donald P. Green and Ron Shachar. 2003. "Voting May Be Habit-Forming: Evidence from a Randomized Field Experiment," *American Journal of Political Science*, 47(3): 540-550.
- Green, Donald P. and Ron Shachar. 2000. "Habit-Formation and Political Behaviour: Evidence of Consuetude in Voter Turnout," *British Journal of Political Science*, 30: 561-573.
- Hall, S. Roland. [1924] 1985. *Retail Advertising and Selling*, New York: Garland Publishing.
- 平野浩・岡田陽介. 2014. 「選挙・投票にまつわる有権者の政治的エピソード記憶 — JESIV自由回答データのテキストマイニング —」『法学会雑誌』第50巻, 第1号, 151-172頁。
- 池田謙一. 1991. 「投票行動のスキーマ理論」『選挙研究』第6号, 137-159頁。
- 池田謙一. 1994. 「政党スキーマと政権交代」『レヴィアサン』第15号, 73-103頁。
- 池田謙一. 1997. 『転変する政治のリアリティ — 投票行動の認知社会心理学』木鐸社。
- 今井亮佑. 2008. 「政治的知識と投票行動 — 「条件付け効果」の分析」『年報政治学 2008-I』283-305頁。
- 稲増一憲・池田謙一. 2007. 「政党スキーマ・小泉内閣スキーマから見る小泉政権」池田謙一(編)『政治のリアリティと社会心理 — 平成小泉政治のダイナミックス』木鐸社, 3章, 69-105頁。
- 蒲島郁夫. 1988. 『政治参加』東京大学出版会。
- Linton, Marigold. 1982. "Transformation of Memory Life in Everyday Life," In *Memory Observed: Remembering in Natural Contexts*, ed. Ulric Neisser and Ira E. Hyman, San Francisco: W. H. Freeman, 77-81.
- 三宅一郎. 1989. 『投票行動』東京大学出版会。
- 岡田陽介. 2008. 「投票参加のエピソード記憶が後の投票参加に与える影響」『学習院大学大学院政治学研究科政治学論集』第21号, 1-23頁。
- 岡田陽介. 2011a. 「政治的出来事のポジティブな記憶が政治意識に与える効果」『日本社会心理学会第52回大会報告論文集』47頁。
- 岡田陽介. 2011b. 「自己の投票行動の記憶とその正確さが後の投票参加に与える影響」2011年度日本政治学会報告論文。
- Okada, Yosuke. 2013. "Do You Remember Whether You Participated in the Past Election?" *Journal of Political Science and Sociology*, (18): 1-22.
- Plutzer, Eric. 2002. "Becoming a Habitual Voter: Inertia, Resources, and Growth in Young Adulthood," *American Political Science Review*, 96(1): 41-56.
- Richardson, Bradley M. 1986. "Japan's Habitual Voters: Partisanship on the Emotional Periphery," *Comparative Political Studies*, 19(3): 356-384.
- Richardson, Bradley M. 1988. "Constituency Candidates Versus Parties in Japanese Voting Behavior," *American Political Science Review*, 82(3): 695-718.
- Sujan, Mita, James R. Bettman and Hans Baumgartner. 1993. "Influencing Consumer Judgments Using Autobiographical Memories: A Self — Referencing Perspective," *Journal of Marketing Research*, 30(4): 422-36.
- Tulving, Endel. 1972. "Episodic and Semantic Memory," In *Organization of Memory*, ed. Endel Tulving and Wayne Donaldson, New York: Academic Press, 381-403.
- Tulving, Endel. 1983. *Elements of Episodic Memory*, New York: Oxford University Press.
- Tversky, Amos and Daniel Kahneman. 1974. "Judgment under Uncertainty: Heuristics and Biases." *Science*, 185(4157): 1124-1131.
- 山崎新. 2008. 「政治知識が投票参加に与える影響 — GLOPE 2005 データによる実証分析」『早稲田政治公法研究』第88号, 1-10頁。